

第4分科会	見方・感じ方を広げる	学年	小学5年
提案者	みどり市立大間々東小学校 生形 裕子		

テーマ 「鑑賞：見る・感じる・ふくらむ」 題材：アートカードで楽しもう

① はじめに

図工の作品を鑑賞していると、なかなか感想が書けない児童がいる。自分の感じ方や想いに自信がもてず、手が止まってしまうのだと思う。もっと児童の気持ちを和らげて、感じ方は人それぞれだから自由に感じたままを話したり書いたりしてよいことをどの子にもわかってほしいと思う。そこで、「アートカード」を使って本国や諸外国の親しみのある美術作品に触れさせ、その見方や感じ方、イメージなどを友だちと共有し合うことで、共感したり違った感性に触れて見方を広げたりできるように本題材を設定した。そして、クイズ方式にして楽しみながら作品の見方を広げられるような活動を考えてみた。

② 実践の概要

(1) 題材の内容

美術作品は子供たちにはあまり身近なものではなく、感想を求められても作品の見方がわからなかったり、自分の素直な感想に自信をもてなかったりすることが予想される。そこで、まず一つの作品（風神雷神図）について授業の初めにクラス全体で感想を共有する時間を設けた。作品の感想を素直に述べ合う時間を取り、ほかの児童の感想を聞いたり共感したりする中で、自分の感じ方に自信をもったり、その感じたことを素直に表現することに抵抗感をもたないようにしたい。また、自分なりの感じ方を表現した際に、共感的な雰囲気作りを大切にしたいと考えた。他の児童の感想を聞いても、いざ自分なりの感想、といわれると鑑賞する糸口が持てない児童も考えられるため、鑑賞する際の見方のポイントとなる観点を板書に示し、振り返るようにした。

本時で各自が行う「アートカードクイズ」を、個人で行う前にクラス全体で教師が模範を見せることで、クイズを出す側、出される側のイメージをもてるようにした。風神雷神図の鑑賞の中で示した見方・感じ方の観点（色・描かれたもの・場面・どんな言葉が聞こえてきそう・作品の題名 等）でワークシートの穴埋めをすることがクイズとなることも、教師が実践することでイメージできるように考えた。クイズの答えとなる一つの作品について教師が感じたそれぞれの観点の感想を元に、自分が想う作品を8つの作品の中から予想させ、挙手で答えさせた。教師のヒントから作品のイメージが絞り込めるよう、また、違う作品でも似たようなイメージがあることに気づけるよう8つの作品選びも考えた。

実際の個人の鑑賞の際には「アートカード」を用いることで、たくさんの作品を鑑賞することができ、気になった作品は実際に手に取ってこまかいところまで鑑賞できるようにした。

グループ活動では、さまざまな意見も聞けるように、5人グループとし、全員が時間内にグループ内でクイズの出し合いをして、どの作品について感じたのか共有し合うようにした。

(2) 目標及び評価規準

①目標

美術作品の持つ良さや美しさを味わうとともに、自分なりの見方や考え方を広げ、鑑賞することの楽しみや興味を広げる。

②評価基準

知識および技能：美術作品を見るときに感覚や行為を通して、形の感じ、色の感じ、それらの組み合わせによる感じなどがわかる。

思考力、判断力、表現力：作品の造形的な良さや面白さ、特徴などについて感じたり考えたりし、自分の見方や考え方を広げる。

学びに向かう力、人間性：進んで美術作品を鑑賞し、その良さや美しさを味わおうとする。

(3) 授業の実践 (全1時間)

	学習活動	支援および留意点	児童の様子
1	「風神雷神図」の拡大掲示物を掲示し、クラス全体で鑑賞する。 	・作品のタイトルや作者は伏せ、子供たちの自由な感性で感じたことを大切にしていく。 ・子供たちが感じたことを板書にまとめ、後で振り返ることができるようにする。 ・自由な感想が出にくいときは、「色は?」「どんな場面だろう?」などヒントを与えていく。 ・板書には、描いてあるもの、色、○●な感じ、～と言っている、タイトルはズバリ!の項目に分けて児童の感じたことをまとめていく。	・描いてあるものとして、風神・雷神・稲妻・太鼓・布などがあがった。 ・「戦っているところだ」「似ているから仲よさそう」「仲は良くはなさそう」「一緒に台風を起こしている」などの感想があがった。 ・全員が意見を言えたわけではないが、多くの児童が自由に感じたことを発言していた。 ・ほかの児童が言った印象に賛同したり逆に感じたイメージを伝えたりしあうことができた。
2	本時で児童が行う「アートカードクイズ」を教師が手本を見せ、クラス全体に解いてもらう。アートカードの中の8つの作品を提示する。	・児童が使うものと同じワークシートに記入したものを提示することで、記入のイメージが持てるようにする。 ・教師が記入した内容をかくしておき、はがしながら順にクイズの内容を提示していくことで、どの作品にも共通する印象から徐々にその作品にしかない印象に絞り込んでいけるようにする。 ・挙手をして自分はどの作品のことを言っていると思ったか答えさせる。	・最後のクイズまで聞くと、どの作品のことを言っているのか絞れてきたようだったが、全員の答えが一致するわけではなく、大きく二つの作品に意見が分かれた。感じ方は人によって違いがあるし、同じ人でもその日の気持ちによって同じ作品の印象が違うこともあるので、それも鑑賞の面白さであることを伝えた。 
3	・グループごとに実際のアートカードを鑑賞し、ワークシートに記入してクイズを作る。 ・互いにクイズを出し合う。	・グループで1セットのアートカードを広げ、近くで鑑賞できるようにする。 ・自分で気に入った作品についてワークシートに記入していく。 ・グループ内でクイズが終わった人は、他のグループの人とも出し合って感想を交流できるようにした。 	・アートカードの数も多かったので、どの作品にしようか迷っていたり、作品は決まってもタイトルなどを考えるのに時間を要していたりする児童が見られた。 ・互いのクイズに対して、共感し合ったり、「え、どの辺が?」とさらに感想を聞き合ったりする様子が見られた。 
4	振り返り	・ワークシートに振り返りを記入する。	・よく見たて伝え合うことはよくできたと振り返っている児童が多い。 ・感じ取ることに難しさを感じた児童も見られた。

3 おわりに

成果 ○クイズ形式にすることで、美術作品を抵抗感なく鑑賞することができ、また観点を示すことで一つの作品についていろいろな見方で見ることができた。

○クラスやグループなどの形態を変えることで、多くの感じ方にふれることや、自分の感じ方を広げていくことができた。

課題 ●美術作品としての良さや美しさという観点で深く感じ取り鑑賞できるようになるとよい。

●何回か経験を重ねることで、さらに児童の自由な発想や「どこからそう思ったの。」「おもしろいねえ。」「ああ、なるほど、そうか。」などの言葉の交流が広がると思われるので、今後も行っていきたい。

